おおさか KEY わーど 第26回

北野恒富の筆が冴える女性心理の描きわけ

谷崎潤一郎『細雪』にインスピレーションを与えたか？

北野恒富《いとさんこいさん》全図　昭和11(1936)年　京都市美術館蔵

床机に腰掛けた姉妹二人－いとさんとこいさん－を描いた表紙の作品は、昭和10(1935)年ごろの大阪・船場あたりの商家の情景である。

画家は北野恒富(1880～1947)。近代大阪を代表する日本画家で、明治末から大正初期は宗右衛門町の花街などに取材した妖艶な美人画を得意とし、昭和になると、大阪の祭礼や商家の風俗をとりいれた、品格あるなかにも洒脱な画風を展開した。横山大観に実力を認められ、日本美術院(再興院展)の再興にも大阪からただ一人参加し、大阪初の院展同人になった。高津宮(大阪市中央区)の参道に俳人・河東碧梧桐の書になる恒富筆塚がある。

昭和11(1936)年の改組第1回帝国美術院展に出品されたこの絵の面白さは、なんといっても、二人の姉妹の対照的な姿だろう。題名の《いとさんこいさん》だが、かつて大阪の商家では、お嬢さんのことを「いとはん」「いとさん」と呼んだ。語源は「いとけない」「いとし児」からきたという。また末娘を小さな「いとさん」として「小いとさん」と呼び、それが「こいさん」となった。

画面の右側で両手を上品に前にそろえ、微笑みながら腰掛けているのが長女の「いとさん」、左側に頬杖ついて寝そべっているのが末娘の「こいさん」である。二人着物の図案も同じだが、陰陽が反転し、「いとさん」の着物はまるで月夜の草花を見るかのようで、帯の部分に用いられたレースも繊細である。これに対して、お転婆な「こいさん」は、着物は白く真昼の草花のようで、ぽいとぬぎすてられた履き物も前後がそろわない“あっちゃこっちゃ”になっている。戦後の歌謡曲だが、フランク永井の名曲「こいさんのラブコール」(作詩・石浜恒夫、作曲・大野正雄)も、奔放で芯は強いが、恋にあこがれる可憐なイメージで「こいさん」をとらえている。

二人でどんな話をしているのだろう。映画スターのうわさ話や、ひょっとすると「いとさん」の婚礼が決まったのかもしれない…といった想像も浮かんでくる。物語の一節であるかのように姉妹の気質の違いを、絵画という形であらわした画家の手腕はさすがであり、商家の令嬢をモチーフとすることに、古き大阪によせる画家の思いが詰まっている。

この作品が、大阪を舞台とした小説家・谷崎潤一郎の代表作「細雪」にインスピレーションを与えたという説もある。「細雪」は昭和18(1943)年1月から「中央公論」に連載が開始された。登場人物は、船場の暖簾を誇る蒔岡家の四人姉妹である。大阪の富商の娘であった谷崎夫人の松子の姉妹を題材としたとされるが、恒富は早くから谷崎や松子とも交流があり、昭和5(1930)年の谷崎の『乱菊物語』にも挿絵を描いている。谷崎も恒富の《いとさんこいさん》を知っていたはずだ。

ところで男の子の場合、大阪では「ぼっちゃん」の意味で「ぼん」「ぼんぼん」「ぼんち」などと呼んだ。恥ずかしながら半世紀近い昔の少年時代、私も「ぼんぼん」などと言われたくちである。これを読んで、「ぼんぼん」やら「いとさん」やら呼ばれた記憶がよみがえってきた方も多いと思うが、世知辛い現代、恒富が描いた懐かしく古き大阪の面影は、いまはどこかにきえてしまったようである。

筆者プロフィール
橋爪 節也 はしづめ せつや
大阪大学総合学術博物館館長／大学院文学研究科教授。1958年、大阪市生まれ。東京芸術大学大学院修了。大阪市立近代美術館建設準備室主任学芸員を18年間つとめ現職。専門は日本美術史。展覧会では「没後200年記念　木村蒹葭堂―なにわ　知の巨人―」「北野恒富展」「没後80年記念　佐伯祐三展」などに携わる。編著に『大大阪イメージ―増殖するマンモス／モダン都市の幻像―』(創元社)など。